

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12811

研究課題名(和文) 研究公正の理念の学際的検討と日本的な研究倫理の構築

研究課題名(英文) Trans-disciplinary Examination of the Idea of Research Integrity and Construction of Japanese Research Ethics

研究代表者

水谷 雅彦 (Mizutani, Masahiko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：50200001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の教育・研究の風土をふまえた上で、研究倫理・研究公正について根本的な問いかけに基づく基本理念を検討し、不正の起さない研究の制度設計、効果的な研究公正教育の枠組みの提案を行った。具体的には、倫理学や宗教学などの価値論的側面および科学論的側面からみた関連分野のサーベイ研究、構築した研究ネットワークを基に、当該分野の研究者の招へい、国際学会への研究者派遣、定期的な研究討議を通じた共同研究体制の強化を図った。その研究成果として、国内外の研究者を交えたシンポジウムの開催、複数の学会発表、関連論文の出版を行った。

研究成果の概要(英文)：This research project examined principal ideas of research integrity or research based on the fundamental inquiries, while considering the climate of education and research in Japan. It also proposed an institutional design and effective educational framework for research integrity without committing a misconduct. Specifically, based on survey research on relevant fields such as ethics and religious studies and scientific theory as well as research networks built, we invited researchers in the field, sent researchers to international academic conferences, and held regular discussions to strengthen the joint research system. As a result of that research, we held symposiums with researchers both in Japan and abroad, gave several conference presentations, and published research papers.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：研究公正 研究倫理 専門職倫理

1. 研究開始当初の背景

日本国内において、ねつ造、改ざん、盗用といった研究不正の防止や対策は喫緊の課題として重要性が広く認められており、不正防止のために出された具体的な指針も少なくない。

しかし、国内においてそもそも研究公正・研究不正について学術的な研究がほとんど行われておらず、数少ない例外的研究も、もっぱら経験的データに終始するものであった。たしかに海外の研究に目を向ければ、Steneck(2006)のように、単なる不正防止にとどまらない、研究公正の理念に関するある程度理論的な研究が存在する。だがそれも、せいぜい専門職倫理の研究知見を参照するにとどまり、「そもそも本当に研究不正は悪いことなのか」という原理的な問いや、「研究不正防止の仕組みは科学という営みにどういう影響を与えるか」といったより広い視野での疑問に答えるリソースを持たない状況にあった。

加えて、研究公正についてはアメリカの研究公正局の発行する諸文書において定義が行われているが、アメリカの一つの国内機関の行う定義がどれだけの普遍性を持つのか、日本でもそのまま通用するのか、ということは検討されてこなかった。そもそも、「研究公正」の原語は research integrity であるが、integrity という、日本語にならない概念が用いられている（「公正」という訳語は苦し紛れのものにすぎない）こと自体、この概念の文化相対性を示していると思われる。これまで当然視されてきた研究不正や研究公正の理念を、原理的に探究する試みが新たに必要であった。

2. 研究の目的

上記の状況を踏まえ、本研究では、倫理というものが文化や風土に大きく影響を受けるといった視点を導入し、日本の教育・研究のあり方をふまえて、研究倫理・研究公正について根本にたちもどった問いかけに基づく基本理念の枠組みの提案を行うことを目指す。具体的には、以下の三つの根本的な問い（ビッグ・クエスチョンズ）に対し関連する諸分野の知見を集めて、現時点での答えを出すことを第一の目的とする。

(1) 本当にねつ造、改ざん、盗用等の研究不正は悪だろうか、悪であるとすればどういう意味においてか。

(2) 現在欧米で採用「研究不正の理念は本当に望ましいものだろうか。

(3) 欧米の研究公正の理念は日本にもあてはめうるような普遍性を持つものか。

さらにはこれらの問いに対する答えが、日本における現実の政策に対してどのような含意を持つか検討することも視野に入れる。加えて、倫理学（専門職倫理）・科学哲学・

科学技術社会論を中心としつつ、関係する諸分野の研究者の協力を得ながら、理念と実効性を兼ね備えた研究を進める。

3. 研究の方法

本研究では基本的に文献研究とさまざまな分野の研究者を招く研究会の開催を通して、問題を掘り下げる。これらの成果に基づき、日本における研究不正防止のありかた、研究公正の理念のあり方について提言をまとめ、今後の「研究倫理学」という学術分野の構築につなげる。

前掲の三つのビッグ・クエスチョンズに取り組むため、二つの側面から検討を行う。

まず、価値論的側面からの倫理学・宗教学等でこれまで検討されてきた理論の観点から見たとき、研究不正はどんな価値を棄損していると考えられるか、そもそも価値を棄損しているのかを考察する。同時に、科学論的視点からの検討として、研究不正はどのような意味で科学の正常な営みに反しているのかを、そもそも反しているかどうかを含めて考察する。

上述の研究公正に関する原理的な研究成果を踏まえ、日本の大学や研究機関の仕組みに活用されるべきかを検討する。具体的には、西洋発の概念枠組みを日本の価値観や風土にあったものに应用するために、集団的責任論や分析アジア哲学の手法をもって、研究不正を、個々の研究者によって引き起こされるばかりではなく、その研究者の属する研究室、研究機関、研究者コミュニティといった集団という観点から検討した。

4. 研究成果

本研究では、倫理学、宗教学などの価値論的側面および科学論の立場からみた、研究公正に関する関連分野サーベイを、各研究分担者が行い、定期的に討議することでビッグ・クエスチョンズについて検討を深めた。その成果として、研究公正をとらえる基盤となる価値論的および科学論的考察、すなわち本研究では宗教哲学、倫理学、東アジア分析哲学、科学論の観点から各研究分担者が成果を論文として発表した。特に、具体的な研究不正の防止に関わる論考として伊勢田哲治(2017)「研究不正とピアレビュー社会論」を出版した。

さらに研究成果の発信ならびに研究ネットワークを構築するため、国内の研究者を招へいし、2015年10月に「研究公正の理念の学制的検討の日本的な研究倫理の構築研究会」ならびに「シンポジウム・これからの研究公正のあり方について考える」とともに京都大学を会場に開催した。翌年2016年には、科学技術社会論学会と日本哲学会の合同シンポジウムとして「科学と社会と「研究公正」」を開催した。科学技術社会論と哲学と

いう、通常は接点が多いとはいいがたい分野の研究者を集め相互交流の中から論点を見出すことができた。加えて海外との連携も進め、欧州の研究公正推進プロジェクト PRINTEGER と連絡をとり、英国プリストル大学で 2016 年 9 月に研究公正に関するワークショップを開催した。さらに翌年 2017 年 10 月には、国際高等研究所で国際ワークショップ「多様性と信頼」を開催し、研究代表者の水谷をはじめ、日本、台湾、ドイツの研究機関に所属する研究者による講演や研究討議を行い、専門職倫理に関する文化や地域を超えた共通点と相違点について国際的な比較をすることができた。

<引用文献>

N. Steneck, Fostering Integrity in Research: Definitions, Current Knowledge, and Future Directions, Science and Engineering Ethics, 12, 2006, 53-74

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 13 件)

芦名 定道、宗教哲学にとっての脳神経科学の意義、宗教哲学研究、査読有、35 巻、2018、1-12

伊勢田 哲治、研究不正とピアレビューの社会認識論、科学技術社会論研究、査読無、14 巻、2017、49-62

芦名 定道、現代神学と経済--聖書の社会教説から社会科学へ 2、福音と世界、査読無、4 巻、2017、54-59

児玉 聡、オンラインコースで届ける生命倫理入門、CAP、査読無、8 巻、2017、5007-5008

DOI: 10.14989/226255

芦名 定道、南原繁の政治哲学とその射程、日本哲学史研究、査読無、13 号、2017、33-58

芦名 定道、現代日本における宗教哲学の構築をめざして、キリスト教学研究紀要、査読無、5 号、2017、1-20

芦名 定道、東アジア・キリスト教研究の可能性--現状と課題、アジア・キリスト教・多元性、査読無、15 号、2017、169-180

Hiroaki ITAI, Akira INOUE, Satoshi KODAMA, Rethinking Nudge: Libertarian Paternalism and Classical Utilitarianism, The Tocqueville Review/La Revue Tocqueville, 査読有、37 巻、2016、81-98

田中美穂、児玉 聡、川崎協同病院事件判決・決定に関する評尺の論点整理、生命倫理、26 巻、査読有、2016、107-114

Deguchi Yasuo, Tientai and Takahashi on the Three Satyas, 哲学研究、査読有、600 巻、2016、1-26

八代 嘉美、実験台は世界につながっていたか、年報 科学・技術・社会、査読無、24 巻、2015、25-34

児玉 聡、法と倫理学、法と哲学、査読無、1 巻、2015、83-91

Satoshi Kodama, Tsunami-tendenko and morality in disasters, Journal of Medical Ethics, 査読有、41 巻、2015、361-363
DOI: 10.1136/medethics - 2012 - 100813

[学会発表](計 30 件)

伊勢田 哲治、埋め込み型研究公正教育のすすめ、京都大学信任教員教育セミナー(招待講演) 2017

水谷 雅彦、Why Diversity is Important?、国際ワークショップ「多様性と価値」(招待講演)(国際学会) 2017

Ttsuji Iseda, Philosophical reflections on research integrity in the global context, Reseach Integrity Workshop(国際学会)、2016

伊勢田 哲治、盗用や不適切な著者表示は本当に悪いことなのか、日本倫理学会第 67 回大会(招待講演) 2016

Satoshi Kodama, A Short Report of the End-of-life, Bristol-Kyoto Workshop on Ageing, Health & Ethics (招待講演)(国際学会) 2016

児玉 聡、ヒト胚へのゲノム編集技術：臨床利用の是非、生命倫理学会公募ワークショップ(招待講演) 2016、

児玉 聡、医療経済評価結果の医療資源配分への応用に関する倫理的課題、医療薬学フォーラム 2016 (招待講演) 2016

芦名 定道、脳科学と宗教倫理の接点を探る、宗教倫理学会、2016

芦名 定道、東アジア・キリスト教交流史研究の地平--現状と課題の分析より、東アジア・キリスト教交流史研究会、2017

Deguchi Yasuo, The Structure of Shamelessness: A View from Fukushima, 2nd East-West Philosophy Forum: Humility, Faith and Science in the Eastern and Western Traditions (招待講演)(国際学会) 2016

Deguchi Yasuo, Ethics of Emptiness: Self and Privacy of Suffering, Workshop on Moral Responsibility and Self-Knowledge (国際学会) 2016

伊勢田 哲治、Research Integrity から研究公正へ、人文・社会科学のための研究倫理シンポジウム 研究公正と研究倫理を問

い直す(招待講演)、2015

伊勢田 哲治、研究不正は本当に悪いことなのか、第1回「研究公正の理念の学際的検討と日本的な研究倫理の構築」研究会、2015

伊勢田 哲治、倫理的クリティカル・シンキングの対象としての宇宙探査・宇宙開発、科学技術社会論第14回年次研究大会、2015
Satoshi Kodama、The Utilitarian Morality and the Normative Question、The 3rd Taiwan Metaphysics Colloquium(招待講演)(国際学会) 2015

Yasuo Deguchi、Three Four from One Another Dialetheism & Buddhism、1st Veritas Philosophy Symposium(招待講演)(国際学会) 2015

他 14 件

〔図書〕(計 7 件)

児玉 聡、弘文堂、科学知と人文知の接点、2017、268(255-270)

児玉 聡、勁草書房、入門・倫理学[改訂版]、2018、312(13-25、177-193)

児玉 聡、勁草書房、入門・医療倫理(改訂版)、2017、412(17-29、289-309)

児玉 聡、岩波書店、哲学トレーニング2、2016、203(150-158)

伊勢田 哲治、なつたか、化学同人、マンガで学ぶ動物倫理 わたしたちは動物とどうつきあえばよいのか、2015、151

Koji Tanaka、Yasuo Deguchi、Jey Garfield、Graham Priest、Oxford University Press、The Moon Point Back、2015、285

呉羽真、水谷雅彦ほか、宇宙倫理学研究会：宇宙倫理学の現状と展望m宇宙航空研究開発機構特別資料：人文・社会科学研活動報告、2016、37-61

〔産業財産権

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水谷 雅彦(MIZUTANI, Masahiko)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50200001

(2) 研究分担者

芦名 定道(ASHINA Sadamichi)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20201890

出口康夫(DEGUCHI, Yasuo)

京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20314073

八代嘉美(YASHIRO, Yoshimi)

京都大学・iPS細胞研究所・特定准教授
研究者番号：30548566

海田大輔(KAIDA, Daisuke)

京都大学・大学院文学研究科・講師
研究者番号：40649133

伊勢田哲治(ISED, Tetsuji)

京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80324367

児玉聡(KODAMA, Satoshi)

京都大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：80372366

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし